

アゲシラオスとパルナバゾスの会談 (HG.4.1.29~39) ¹

根本英世

前三九六年スパルタ王アゲシラオスはエペソスに到着した (3.4.5)。以後の彼は、ペルシア側の將軍スピトリダテスを味方につけ (3.4.10)、サルデイス周辺の戦いでティッサペルネスの軍を破り、プリュギアへ入る (3.4.終わりまで)。ここで、スピトリダテスの斡旋により現地パプラゴニアの王オテュスと同盟し、また前者の娘を後者に娶らせることによって、両者のペルシア王からの離反とラケダイモンへの結びつきを強固なものとする (4.1.1~15)。さらにパルナバゾスの居地ダスキュレイオンを目指し、その王宮、庭苑を蹂躪し、周辺の豊かな村落で思うままに略奪をはたらく (4.1.15~16)。本営に襲撃を受けたパルナバゾスは、貴重品、食糧、運搬用家畜を奪われたが、なすすべもなく、自分の領国内を放浪するありさまであった (4.1.24~25)。しかしこの際の略奪品の扱いをめぐって、ラケダイモン側と現地軍との間に齟齬が生じ、スピトリダテス父子およびパプラゴニア軍がアゲシラオスのもとを去る (4.1.28) ²。これは、土地のサトラペス、パルナバゾスを眼前の敵とするアゲシラオスにとっては、大きな痛手となった³。このような状況下で、アゲシラオスとパルナバゾスの会談がおこなわれることになる。クセノポンはこの会談を詳述しているが、以下にこのシーンを吟味し、また主にプルタルコス『アゲシラオス伝』との比較によって、クセノポンの描写方法の特質、またその意図を考えてみたい。

I

¹ 以下で、クセノポン『ギリシア史』はHGと略記する。クセノポンの作品はOCT、プルタルコスの作品はTeubner版に拠った『アゲシラオス伝』、『リュサンドロス伝』以外は、Loeb版による。

² 戦利品は、ラケダイモンでは競売にかけるため「戦利品売却係」に渡されるが (Xen. Lak. Pol. 13.11)、これをスピトリダテスやパプラゴニア人は「不当な処遇で、自分たちの名誉を損なうもの」と考えたのである (HG. 4.1.27)。

³ スピトリダテスは騎兵二〇〇を、オテュスは騎兵一〇〇〇と盾兵二〇〇〇を、率いてアゲシラオス麾下に入っていた (HG. 3.4.10, 4.1.3)。またPlu. Ages. 10.5は「自分だけでなく祖国 (ラケダイモン) に対する、ケチで自由人にふさわしくない、という非難を恥じた」とも伝える。しかし最大の痛手は、「現地に精通している有力者」に離脱されることであった。

HG 第四巻⁴に描写されるこの会談シーン全体の構成を確認すると、

- A.会談のきっかけ (1.29)、
- B.会談直前のエピソード (1.30)、
- C.会談 (1.31～38)、
- D.会談後のエピソード (1.39)、に分けられる。

まず A.を見てみよう。テキストでは、たまたまアゲシラオスの客人となっていたキュジコス人アポロパネスなる人物が、パルナバゾスと賓客関係にあり、彼を和平会談に連れ出すことができる、と申し出たことになっている。これは、前述のごとく、頼りとしていた離反者を出した直後のアゲシラオスにとっては、渡りに船の提案であったと考えてよい。一方、同じくクセノポンの『アゲシラオス』は、「パルナバゾスもまた、彼のもとに会談のためにやってきた」と伝える。ここでは、アポロパネスは現われず、ペルシア王麾下の將軍や現地民の王がアゲシラオスのもとへ参じる例の一人として、パルナバゾスが言及されている⁵。しかし、この会談を記録する数少ない文献のひとつ、プルタルコス『アゲシラオス伝』は、「パルナバゾスが会談を望み、アポロパネスが設定した」と、会談の「きっかけ」として、ペルシア側の事情を挙げている⁶。

クセノポンの『アゲシラオス』では、このラケダイモン王を称えるあまり、しばしば客観的事実さえ無視されることが、しばしば指摘されている。たしかにアゲシラオスはペルシアの将スピトリダテスとパプラゴニア王オテュスを味方とすることができた。だが前者の場合はリュサンドロスの手柄というべきであるし、後者を自陣営に獲得できたのは、前者が後者を説得したからにほかならない⁷。また『アゲシラオス』では、敵をも惹きつけるアゲシラオスの信義の厚さを強調し、その例としてこの両者を挙げるが、のちに二人とも彼のもとを去ったことには言及しない。したがって、『アゲシラオス』のアポロパネスに関する沈黙は、作家の記述目的に適わなかったゆえ、と考えてよい。

では「会談」は、ただアポロパネスの斡旋によるのか、それともプルタルコス

⁴ 以下 HG 第四巻の箇所は、コンテキストから誤解が生じない限り、算用数字で章と節のみを示す。

⁵ Xen. Ages.3.3-5.

⁶ Plu. Ages.12.1

⁷ スピトリダテスがペルシア王と気まずくなったの知ったリュサンドロスが、王から離反するように彼を説いて、アゲシラオスのもとに連れてきたのである

(HG.3.4.10)。またスピトリダテスの言葉に従ってオテュスは、アゲシラオスに大兵力を委ねる (HG.4.1.1～3)。だがこの両異邦人の（さらに自身との）紐帯を強化するために「婚姻」を思いついたのは、アゲシラオスの「外交手腕」であろう。

の記述のように、「パルナバゾスが望んだ」ことなのだろうか。アポロパネスという人物は、ここの会談に関連して現われるのみで、管見の限り、ほかの資料には言及されていないので、その地位・素性については不明である。だがここで注目されるのが、彼が「たまたま昔からパルナバゾスと賓客関係にあり」、「この当時アゲシラオスの客人となったところ」との記述である(1.29)。「昔から」が、どれほど以前を指すか不明であるが、「客人となったところ」⁸とされるのだから、アポロパネスはアゲシラオスよりもパルナバゾスとの関係が深かった、と認めてよい。するとパルナバゾスが、この時点でも、アポロパネスと何らかの連絡はとっていたのは当然であるし、ラケダイモン軍の侵攻に日々の食べ物にも不自由している彼が(1.33)、和平会談の設定を依頼したことは十分考えられる。その場合「和平会談」は、パルナバゾスの意を受けて、アポロパネスがアゲシラオスに持ちかけ、戦力離脱のため異国の地で困り果てていたアゲシラオスが受け入れた結果、と見るのが自然であろう。

ではクセノポンは、なぜ「パルナバゾスが望んだ」ことを記述しなかったのか、という疑問が生じる。この会談は、結果としては、アゲシラオスの説得失敗、に終わる。ここで、会談がペルシア側の事情であることを明言した場合、機会を生かしきれなかったアゲシラオスの能力評価の問題となるであろう。この危険をクセノポンは避けたのではないか。アゲシラオス像にとってマイナスとなることに沈黙するのは、前述および後述のように、クセノポンの常套手法である。

B.では「バルバロイの贅沢」と「ギリシア人の質素」が対比されるが、このモチーフ自体は伝統的なものである⁹。HGでは、ラケダイモンの王でさえ草地にじかに腰を下ろす、という質素さと、敷物を用意させるペルシア貴族の贅沢が、コントラストに置かれているのである。この際のパルナバゾスの反応をクセノポンはἡσυχύθη「恥じ入った」と描き、プルタルコス『アゲシラオス伝』は αἰδέσθεις「憚りを感じて」と描写する。だがパルナバゾスは、なぜ自己の「贅沢」に対してひけ目を感じるのだろうか。クセノポンによれば、本来ペルシア人は、敬虔、廉直など、さまざまな美德を誇っていたが、メデアの風に染まり、いつのまにか贅沢に慣れてしまった。今では、寝床の下に柔らかい敷物を必要とするどころか、床の硬さを感じないですむように、カーベットのの上にベッドを据える、ほどである。贅沢のあまり、軟弱に堕したといえよう。その挙句、戦をするにもギリシア人傭兵に頼る、ありさまである。すなわちこのシーンでパルナバゾスが、アゲシ

⁸ アポロパネスについて ἐξενώθη とアオリストが用いられている。

⁹ E.g. Hdt. 9.82

ラオスの質素さを見て、自分も大地に直接腰を下ろしたのは、ただ現象的に「贅沢と質素」の対照を目の当たりにした以上に、ペルシアにもかつては存在した質実剛健の伝統を想起してのことであろう¹⁰。たとえ「贅沢」がペルシア王のサトラペスとしては許されても、武人たる自分が、先人たちがもっていた「身体の強健」という徳を失ってしまっていることに、「恥じ入った」のである。彼が大地に座ることにした理由を、スパルタ王の質素さに「憚りを感じたゆえ」とするだけでは、十分ではない。端的に「恥じ入ったので」と表現するほうが、パルナバゾスの心理を生々しく伝え、叙述は臨場感に溢れたものとなる。さらに、「恥じ入る」という表現によってこそ、パルナバゾスの性格が——彼の本質的な善良さが、活写されるのである。これは、およそ六〇〇年ほど後代のプルタルコスの手筆の及ばないところであろう。この和平会談にクセノポン自身が臨席していた可能性を指摘する研究者もいるほどである¹¹。

II

会談シーンの中核となる C は、挨拶交換 (1.31) ののち、以下のように展開している；

- 1) パルナバゾスによる、a. ラケダイモン軍非難 (1.32)、b. 自己の窮状の訴え (1.33)、
- 2) アゲシラオスによる、a. 反論 (1.34)、b. ペルシア王からの離反の勧め (1.35～36)、
- 3) パルナバゾスは 2)b. を拒絶 (1.37)、
- 4) アゲシラオスがパルナバゾスを称える (1.38)。

まず C1)a. で、パルナバゾスはラケダイモン側に与えたこれまでの好意を述べる。四一〇年キュジコスにおける対アテナイ戦に敗れ、艦隊指令ミンダロスの戦死と艦船の多大な損失に茫然自失するペロポネソス軍¹²を、兵員に二か月分の経

¹⁰ Xen. Cyr. 8.8.3～27 にさまざまな例が挙げられている。たとえば「昔は日に一度のみの食事で、仕事に専心」(9)、「軟弱化した現在は寝床に敷物」(16)、「ギリシア傭兵への依存」(26)。

¹¹ たとえば, Cawkwell, *Xenophon; History of My Times* (Hellenica), Penguin, 23, Th. Lenschau, *RE*, XIX 1843, H. Breitenbach, *RE*, IX A2, 1680. なお後者に引用されている Sordi 論文 (Athenaeum, XXVIII, XXIX) はこの問題を詳しく扱っているようだが、筆者未見。

¹² ミンダロス麾下の副指令ヒッポクラテスが本国に送付した文書 (途中でアテナ

費と衣服を与え、さらに各人に重武装をほどこし、艦船建造までしてやることにより、鼓舞激励したのは、ほかならぬパルナバゾスであった (1.1.24)。また四一年以降、彼は確かにラケダイモン軍あるいはそのペロポネソス同盟軍のために戦ってきた。これらはいずれも、決しておぎなりの援軍ではなく、アビュドスでは自ら馬上に奮闘し (1.1.6)、ランプサコスではアテナイ軍重装歩兵百二〇の追撃を闇を利して辛くも逃げ切り (1.2.16)、さらにカルケドンの戦いは、ラケダイモンの統監ヒッポクラテスが落命するほどの長時間にわたる、激戦であった (1.3.3~7)。どの戦いもアルキビアデス麾下のアテナイ軍に敗北を喫することになったが、彼は怯むことなく、繰り返しラケダイモン軍とともに戦っている。これは、パルナバゾスのラケダイモンに対する誠意が、その場限りのものではなかったことを示そう。ことにカルケドンの戦いののち彼は、アテナイに対する一種の償金として二〇タラントンの支払いを誓わされる羽目におちいつているのである¹³。これらの事実を見れば、その本意が奈辺にあるかはともかく、これまでパルナバゾスが、ときには危険も顧みず、ラケダイモンの味方・同盟者として尽くしたのは、その主張のとおりであることがわかる¹⁴。

C1)b.では、パルナバゾスの現在の窮状が語られる。彼は、アゲシラオスのパプラゴニア侵攻後の敵対行動により、食物にも事欠くようになり、ラケダイモン軍の棄てたものを拾って食べるありさまで、野に棲む獣と変わるところがない、また父の遺してくれた館も庭苑も彼らによって焼かれてしまった、というのである。このシーンに先立つ事実叙述を見ても¹⁵、パルナバゾスの言葉に誇張はない。そして彼は「これが感謝をわきまえた人間のすることだろうか」と結ぶが、これは、ラケダイモン側の行動を忘恩行為とみなすパルナバゾスの弾劾にほかならない。a.

イ軍に押さえられてしまうが) には「艦船潰滅、ミンダロス戦死、将兵は飢餓に瀕し、なすべきを知らず」とあった (1.1.23)。

¹³ 1.3.8 では「(アルキビアデスの) ほかの将軍たちは、パルナバゾスがアテナイ人に二〇タラントン支払い、…との協定をパルナバゾスと結んだ」とある。この事件を伝える Plu. Alk. 35.1 では金額は不明ながら、同様。ただし Diod. XIII66.3 では「アテナイが、以前同様の調貢を受ける、とカルケドンと取り決めた」とある。

¹⁴ この和平会談後にも、クニドスの戦いにラケダイモンの味方として参戦している (4.3.11)。

¹⁵ Cf. 4.1.1ff. 殊に 25 ではラケダイモン軍を避けて自分の領土内を「放浪していた」と語られている。対パルナバゾス攻撃は、すでにデルキュリダスにより行なわれていたが (3.1.9f.)、アゲシラオスによる攻撃は仮借ないものだった (3.4.13f., 3.4.13f.)。ペルシアとラケダイモンの関係が悪化したのは、そもそも後者がキュロス反乱軍を援助し、さらにペルシア王の失地回復をラケダイモンが阻止しようとしたことが、原因である (3.1.1f.)。

ではラケダイモンに示してきた好意を列挙し、b.で、それに対する仕打ちを例示する、という弁論は、その構成が単純なだけに、直接的に訴える力を持つ。実際彼の言葉に対して、ラケダイモン側は沈黙をもって応ぜざるを得なかった。これは、アゲシラオスが 2)で語る「事情」を考慮しても、ラケダイモン側が自分たちの行動にかなりの「疚しさ」を感じていたことを、雄弁に物語るものといってよい。一直線にたたみかけるような、このパルナバゾスの弁論も、作者クセノポンがこの場に臨席していた可能性を強めよう。一方プルタルコス『アゲシラオス伝』は、パルナバゾスは「正当な（弾劾の）言葉に欠くこともなかった」、つまり「いくつもの例を列挙した」と述べるのみである（12.4）。そこではパルナバゾスの言い分は間接話法で叙述されており、正当な非難にも弾劾にもならず、そこには、ただ不満をかこつ哀れなサトラペスの姿が垣間見られるにすぎない。

さらに、パルナバゾスの言葉に対するラケダイモン側の反応を、クセノポンは「（アゲシラオスの参謀）三十人は彼（パルナバゾス）を前にして全員恥じ入り、沈黙してしまった」、またアゲシラオスが発言するのは「しばらくして」のことである、と描写する（1.34）。一方プルタルコスは「アゲシラオスは、随行してきたスパルタ人たちが恥ずかしさのあまり目を地に伏せ、困り果てているのを見て、以下のように言った」と語り、無駄のない叙述にとどまっている。ラケダイモン側の、その場のいたたまれなぬような、気まずい雰囲気伝える点では、HG はるかにまさっている。

III

C2)のアゲシラオスの言葉（1.34～36）は、a.パルナバゾスの弾劾に対する反論（34）と、b.ペルシア王からの離反の勧め（35～36）、に分けられる。まず 2)a.における彼の主張は、「賓客関係にある者同士でも、ひとたび互いの祖国が干戈を交えれば、敵になる」である。これは、「国家の味方は自分の味方、国家の敵は自分の敵と考える」、さらに、「国事を処するにあたって、友に益し敵を害す」というギリシア的理念の延長にあるものと考えてよい¹⁶。しかし HG におけるアゲシラオスは、「ペルシア王に属すものはすべて敵とみなさなければならなかったのです」と多少言い訳めいて、自軍の行動を説明しているのに対し、『アゲシラオス伝』の彼は、「あなたもペルシア王の所有物のひとつになるのを望んでいると見ている

¹⁶ Pl. Leg. 955C, Menon 71E.『法律』では、アテナイからの客人の言葉として、『メノン』では男性の「徳」を規程する際のものとして。

ので、我々が、あなたを通じて彼に害を与えているのも、当然です」と居直りの発言をする(12.6)。また HG の「敵とみなさなければならなかった」は、ラケダイモン側の行動がこの先状況次第で変りうる——これは同時に、次の「離反の勧め」の伏線ともなっている——ことを示唆するが、『アゲシラオス伝』は、たんに現在の行動を説明するのみである¹⁷。会談における両者の言葉の本質を伝える点では、クセノポンもプルタルコスも大差ないが、以下の「離反の勧め」への推移を念頭に置けば、前者の方が自然である。「スパルタ的簡潔さ」を考慮に入れても、現実の会話がプルタルコスの描くように進行したものとは考えがたい。

さらに「離反の勧め」直前に、HG では「何はさておき、あなたの味方になれば、と思っています」という言葉が置かれていることにも、注目したい。およそ説得を試みる場合——この場合は、離反へと——まず相手に対する敵意がないことを示すのは、第一歩であろう。有利な立場にあらうとも、居丈高な態度で相手に接すれば、その説得は失敗に終わる。ことに相手が、この箇所のパルナバゾスのように窮状にあれば、なおさら、その自尊心を傷つけることになることは、明白である。プルタルコスの叙述は、この点で、六〇〇年ほど前のできごとの枠組みのみを正確に伝えているに過ぎない、と評価されても仕方ないであろう。

C2)b.この会談の中核たる「離反の勧め」に移る。プルタルコスはこの箇所でもまた、直接話法を用いながらも、アゲシラオスの発言内容の大意、を伝えるにすぎない。アゲシラオスはパルナバゾスに以下のように言う：「あなたがペルシア王の奴隷よりもギリシア人の味方にして同盟者と呼ばれたいと思う、その日から、この軍隊も武器も艦隊も、我々全員も、あなたの所有物とあなたの自由の守護者になるのだと、お考えなさい」(12.7)。アゲシラオスは、現在のパルナバゾスを「王の奴隷」と決めつけた上で、しかしギリシア人の味方になるならば、ラケダイモン軍が彼を守ってやる、と、半ば恫喝的に二者択一を迫っているのである。A.の考察で述べたように、アポロパネスをこの会談の設定者とするプルタルコスには、パルナバゾスの窮状をアゲシラオスが知っていた、と考えることができたはずである。その彼がアゲシラオスにこのような言辞を吐かせるのは、彼の叙述目的が、会談シーンの再現自体にではなく、別にあったことを、物語るものと思われる。

一方 HG の叙述は、たんに詳細であるだけでなく、その場の雰囲気までみごと

¹⁷ HG.4.1.34 では“ πάντα ἡναγκάσμεθα τὰ ἐκείνου πολέμια νομίζειν” と impf.が、Plu. Ages.12.6 では “ ἐν οὖν καὶ σὲ τῶν βασιλέως κτημάτων ὀρώντες εἶναι βουλόμενον, εἰκότως διὰ σοῦ βλάπτομεν ἐκείνον” と pres. が用いられている。

に描きでしている。すなわち、2)a.末尾で「あなたの味方になりたい」と言ったアゲシラオスは、b.で「だがあなたが、ペルシア王の代わりにわれわれを主人としたいといっても、それは勧めかねる」と語りはじめる。つまり自分の意図は、ペルシア王とは異なり、彼を服従させるのではなく、「われわれと同盟すれば、誰に服従することない」、と言うのである(1.35)。さらに、「貧しくあっても自由たれ、と申すつもりはない」と理想論を振り回すことなく、自己の理念の押し付けは避けている(1.36)。しかしその直後に「われわれを同盟者として、……ペルシア王の、ではなく、自分の帝国を、強大なものにするよう申し上げている」と続ける。実際パルナバゾスが、王に忠誠を尽くして失地回復に努めたところで、それは王領を元に戻すだけのことである。それよりも、ラケダイモンと同盟すれば——つまり王から離反すれば——自分の働きは、そのまま自己の財産になるのだ、というのである。換言すれば、アゲシラオスはパルナバゾスを利で誘っている、と見てよい。ここにはプルタルコスのアゲシラオスが露骨に示す「倣岸さ」は窺われない。クセノポンは、アゲシラオスがこの会談に期待するもの——パルナバゾスの離反——を実現させようとする努力を、すこぶる現実性を帯びた描写によって、成功していると思われる。

ところでこの部分を叙述するクセノポンとプルタルコスに、共通して見られるのが、アゲシラオスが「自由の尊さ」を説くことである。前者では「自由であることは、あらゆる財産に匹敵する」とされ、後者では「自由がなければ、人間にとっては熱心に求めるべきものなど、何も存在しない」と語られているのである。だが、はたして「ギリシアの自由」という概念が、バルバロスであるパルナバゾスに理解できたかどうか、疑問である。たとえば HG のアゲシラオスは、パルナバゾスに自由を求めるよう勧めながら、同時に、「ペルシア王に従属する人々の上に立って、彼らを臣下とするよう」唆しているのである。これは——彼と同じく王に隷従する人々の「主人」となるよう勧めるのは——見せかけの「自由」にすぎまい。つまりアゲシラオスの言う「自由の獲得」とは、パルナバゾスをペルシア王の桎梏から解放し、自陣営へと誘い込むための、大義名分にすぎないのである。この「自由論」には、クセノポンとプルタルコスの抱いていた、「バルバロイ以上のギリシア的価値観」の表出があるのかもしれない¹⁸。

¹⁸ クセノポンは『アナバシス』(1.7.3)で、逆にバルバロイのペルシア王子キュロスがギリシア人傭兵部隊を「諸君が所有している——またそれゆえ私が諸君を祝福する——自由に値する男子たることを、示したまえ」と鼓舞したのち、「私が全財産、その数倍のものに代えても、自由を選びたいと思っていることを、しかと承知してもらいたい」とも、述べている。これも現実のキュロスの発言というよ

さらに HG のアゲシラオスは、「自由かつ裕福となれば、幸福であるために、一体何が不足でしょうか」(1・36) とたたみかける。相手が「自由」という概念をどの程度理解するか心もとない状況ならば、前述のように、利で釣ろうと試みるのである。それも、「自由」と「利」を同時に示すことによって、説得力を高めるだけでなく、相手の——また一方のみを持ち出して失敗した場合、自分の——体面を考慮するという方法が採られている。ここの彼は、ギリシア的理念を説くだけの『アゲシラオス伝』の彼とは異なり、崇高であるのみか、現実的な外交感覚をも備えた人物として描かれている。先に、プルタルコス『アゲシラオス伝』の叙述目的は「会談シーンの再現自体とは別なもの」と述べたが、「伝記」というものの性質を考えれば、その崇高さを描けば十分であろう。たしかに「会談」のアゲシラオスは、『アゲシラオス伝』でも HG でも、自由の旗手のように描かれている。だが、そこに歴史叙述を期待するならば、これだけでは満足できない。実際の会談がどのように進行したのか、いかなる外交上の駆け引きがおこなわれたのか、と問うとき、HG の描写をより高く評価せざるを得ない。

IV

C3)ではパルナバズスが、C2)b.で示されたアゲシラオスの申し出を、拒絶する(1.37)。HG でも『アゲシラオス伝』(12.8)でも、この際のパルナバズスの言葉は、ペルシア王が自分の代わりに別の将軍を派遣してくるならともかく、自分は王から委任を受けている限りは王のためにギリシア人と戦うつもりだ、と伝えられる。しかしこの箇所を吟味すると、HG における「王が私に支配権を委ねるなら」直後の挿入文、「名誉心とはこのようなものらしい」が、『アゲシラオス伝』には存在しないことに気づく。法制度等が未発達な社会には秩序維持のために多くの社会規範が見られ、たとえばペルシアのような社会では、「主」に対する「従」の務めもそのひとつとなっている¹⁹。ペルシア帝国に生きるパルナバズスにとっては、王の信頼という名誉を受け、信義を守り通すことは——王の委任に応じて、力を尽くして外敵の侵攻から国土を守ることは、ギリシア人にとっての「自由への渴望」と同等の意義をもっているのである²⁰。

り、ギリシア人読者を念頭に置いた、キュロス像の理想化、と思われる。Cf. M. Pohlenz, *Griechische Freiheit*, 1955, Heidelberg, 87

¹⁹ S. Hirsch, *The Friendship of the Barbarians*, 1985, Hanover and London, 162n.64

²⁰ ここでアゲシラオスの誘いを拒絶したパルナバズスは、まもなく(三九四年夏)クニドスの海戦で、アテナイのコノンともに、ペイサンドロスのラケダイモン艦

では『アゲシラオス伝』におけるパルナバゾスの発言に、「名誉心」という言葉が見られないのは、なぜだろうか。『アゲシラオス伝』では、名誉心はアゲシラオスの特質とされており、この語 φιλοτιμία が彼に用いられている箇所は、一八にのぼるという²¹。特定の人物の生涯を描く「伝記」という性質上、同一作品の中では、その人物を特徴づける語の使用を、ほかの人間に対して避けるのは、賢明な記述態度であろう。プルタルコスがアゲシラオスの個性を「名誉心」に見て²²、『アゲシラオス伝』ではこの語をパルナバゾスに対して使用しなかったのではないか。だがクセノポンは「伝記」を書いているわけではないのだから、この制約を受けない²³。むしろこの語を用いることにより、会談シーンのパルナバゾスの弁論に生彩を与え、ペルシアの価値観を描き出すことに成功している。

ペルシア王を主と戴くかぎりは、力を尽くしてギリシア軍と戦火を交えるつもり、と明言して拒絶したパルナバゾスに対して、HG (1.38) でも『アゲシラオス伝』(12.9) でも、アゲシラオスは彼の手を取り、「このような人物こそ友としたい」と称える。ここには、パルナバゾスに対する賞賛のみならず、ひとたび結ばれた主従の関係をあくまで守り抜こうとする、パルナバゾスの態度を——その武人としての誠実さを——評価できるアゲシラオスへの賞賛も読み取れよう。しかし「武人同士」の会談を、一種の清々しさをもって締めくくることが、続くアゲシラオスの言葉であるが、これはプルタルコスには見られない。HG のアゲシラオスは、「しかしこれだけをご承知ください。私はできるだけ速やかにあなたの領土から立ち去ります。将来戦となっても、ほかに攻撃すべき敵があるかぎり、あなたにもあなたの軍にも手を出さないつもりです」と約束する。この言葉には、これまでの侵攻・略奪のようなことは控えるし、領土を立ち去りもする、だが総力戦となって、向かうべき敵がいなければ、自分のほうも容赦なく戦うつもりである、というアゲシラオスの決意が表われている。これは、C3)末部 (1.37、cf. Plu. Ages. 12.8) におけるパルナバゾスの言明に対応するもので、このアゲシラオスの言葉をもってこそ、両将の会談はあますところなく、描かれたことになる。前

隊を撃破する (4.3.10f.)。さらに各地のラケダイモン統監を放逐する (4.8.1)。なお philotimiaφιλοτιμία は「功名心」のニュアンスが強い場合もあるが、この会談シーンでは、ペルシア王との関係から、「名誉心」と考えた方がよい。

²¹ Shipley, *Plutarch's Life of Agesilaos*, 1997, Oxford, 12

²² Plu. Ages. 2.3 は、アゲシラオスは少年期から「名誉心」を示していた、とする。

²³ F. Sturz, *Lexicon Xenophonticum*, Leipzig, 1804 (rep. Heildesheim, 1964)によれば、HG における φιλοτιμία の用例は、この箇所のみ。形容詞 φιλότιμος も、アゲシラオスの妻の兄弟ペイサンドロスのみに用いられる (3.4.29)。『アゲシラオス』では φιλοτιμότατος の形で一度だけ見られる (10.4)。

述のように、「会談シーン」再現を目的としないプルタルコスでは、両者の会談そのものは、「このような人物こそ友としたい」で終えてしまっている。だが HG に見られる彼の言葉が続いてこそ、尚武を最高価値に置くラケダイモンの王アゲシラオス像が真実味をもって、さらに、会談そのものもより現実味をもって、描出されることになるのである。

V

この二人の会談が終わると、バルナバゾスはその場を後にするが、彼の息子はアゲシラオスに近寄り、賓客関係の締結を申し出る。アゲシラオスは、それを受け入れ、両人は贈り物の交換をおこない、絆を堅固なものとする。そこには、バルバロイの初々しい若者とラケダイモン王の友情という、ほほえましさに溢れたモチーフが見られる²⁴。しかし、歴史記述という点では、弁論の応酬に窺われるギリシアとペルシアの価値観の衝突など、両将の会談そのもののほうが、重要である。窮したバルバロイの将とラケダイモンの将との和平会談が、どのように展開するのか、読者は固唾を飲んで読み進む。

この和平会談シーンは、上にしばしば比較対照したプルタルコス以外にも、テオポンポスが扱っていたらしい。トゥキュディデスを引き継いだとされる彼の『ギリシア史』はわずかな断片が残るのみで、その文体や方法などについては、推定さえ困難である。しかしこの両将の和平会談シーンについては、幸いにも、テオポンポスの作品における描写と HG のものの比較する、後三世紀のポルピュリオスの、以下のような評価が伝えられている。

「…キュジコス人アポロパネスの斡旋によるバルナバゾスとアゲシラオスの会談、また和平に関する〔兩人〕相互の議論を、クセノポンは（『ギリシア史』）第四巻で非常に優美に、兩人にふさわしく、描写している。テオポンポスは、これを改変して『ギリシア史』第十一巻に取り入れて、緩慢で、生気のない、効果のないものに、してしまっている。というのは、彼が、弁論の勢いを——また剽窃によって入念さを、作品の中に入れて、示そうと努力はしているものの、逡巡するかのように、（描写を）だらだらと遅延させることによって、クセノポンの生彩と澀刺さを台無しにしているのは、歴然たるものだから。」²⁵

²⁴ バルナバゾスの息子とアゲシラオスの賓客関係については、別稿で論じたい。

²⁵ Jakobý, *Fragmente der griechischen Historiker*, 115(Theopompos)F21 Porphyrios bei

ボルピュリオスは、テオポンポスがクセノポンを改変するだけでなく、剽竊までした挙句、失敗している、と評する。テオポンポスの生年（前三七八／三七七年）からみて、彼がクセノポンの HG を利用したと考えることは十分に可能である。少なくともテオポンポスが、会談の場に臨席していた可能性さえ推定されるクセノポンに比して、不利な立場にあるのは——HG あるいはほかの二次的資料に頼らざるを得なかったのは、事実である。HG には、ドラマティックなエピソードの記述が多い²⁶。つまりクセノポンは、ほかの史書が関心を払わぬような出来事を詳述することがあり、彼自身それを意識しながらおこなっている²⁷。そしてこれらを記述する際、彼はしばしば筆の冴えを見せるのである。これらのことを念頭に置けば、HG あるいは非常に詳しい別のヴァージョンを用いたらしいテオポンポスが²⁸——冗長な表現で知られていたテオポンポス²⁹が、クセノポンの描写に及ばないのも、理解できよう。さらに、プルタルコス『アゲシラオス伝』の「テオポンポスもどこかで言っているように」という記述から、プルタルコスはテオポンポスの作品を読んでおり、彼がテオポンポスの『ギリシア史』を資料として用いたことはほぼ間違いない³⁰。これまでクセノポンとプルタルコスの描写を比較してきたが、前者の的確さは、この事情を考慮すれば、当然のことと考えられる。

VI

では、HG における和平会談の描写の目的は、何であろうか。「アゲシラオスの

Eusebios PE X3

²⁶ Bruce は、オクシュリンコス出土のパピュロス『ギリシア史』は、スピトリダテスの娘の結婚など、軍事行動に関係のないことに関心を払わない、と見る (*Historical Commentary on the Hellenica Oxyrhynchia*, Cambridge, 1967, 134)。実際パピュロス『ギリシア史』は、アジアにおけるアゲシラオスの軍事行動について、HG あるいは『アゲシラオス伝』よりも、詳細である。

²⁷ 例えば、ラケダイモンの艦隊指令テレウティアスのアイギナ離任に際して、部下たちが示した惜別の情を感動的に語ったのち、「これが記述に値しないことはわかっている……（兵士にこれほど慕われるのは）一人の男の偉業である」と付言している (HG 5.1.3~4)。

²⁸ V. Gray, *The Character of Xenophon's Hellenica*, 1989, Baltimore, 56. Shipley, *op. cit.* 180.

²⁹ E.g. Dionys. Hal., *Ep. ad G. Pompeium* 6, Longinus, 43.2f., Demetrius, 27, 247.

³⁰ Plu. *Ages.* 10.10. この前に「アゲシラオスが当時の人々のうちで最も偉大で著名な人物だと、誰もが認めるところであった」とある、cf. Lenschau, *op. cit.* 1846. なおプルタルコスは、ほかにも（『政治訓』 *Praecepta gerendae reipublicae*）テオポンポスを利用したらしい、cf. Shipley, *op. cit.* 407.n.47.

政治的英知と外交手腕を示すため」との解釈もあるが³¹、これには承服しがたい。たしかにこの会談シーンにおけるアゲシラオスの弁論には、プルタルコス『アゲシラオス伝』のものほど居丈高ではない、バランスのある現実感覚が見られ、これが政治交渉に必須であることは論を俟たない。しかしアゲシラオスは、パルナバゾスを説得してペルシア王から離反させることはできなかった。つまり政治的な英知と外交手腕が発揮されなかったからこそ、交渉は——アゲシラオスから見れば——失敗に帰したのではないか。この会談で際立つのは、むしろ交渉相手パルナバゾスの態度、その倫理的一貫性であろう。窮状にある彼の高貴な拒絶こそ、このシーンでは強調されていると考える研究者もいる³²。視点によっては、このようにシーン描写の目的を、アゲシラオス像、あるいはパルナバゾスという人物の描出、と考えることはできる。だが、例えば HG では、アゲシラオスを国家の理想的指導者として強調されているが、ときには、そのために「最良の引き倒し」の観を呈すこともある。理想化のあまり、彼の欠点・失敗に沈黙することにより、歴史叙述としての公平さが疑われる箇所が見られるのである³³。このようなクセノポンにとって、アゲシラオスを称えるために、失敗に終わった和平会談を長々と語る必要など、なかったであろう。

ここで想起したいのは、C におけるアゲシラオスとパルナバゾスの弁論の応酬である。前者が作品の随所で称えられるスパルタ王ならば、後者は、会談直前にラケダイモン側の質素さを目にして、わが身の贅沢を恥じ入る余裕をもつ人物である。このような両将の会談ゆえ、アゲシラオスが「自由」の素晴らしさを説けば、パルナバゾスはペルシア王への信義を守ろうとする。たとえ前者が語る「自由」が、離反の勧めという計算づくのものであっても、その主張のうちにはギリシア的理念が明確に掲げられている。後者も、王に服従するかぎり、戦場で相見

³¹ Shipley, *op. cit.* 180

³² Gray, *ibid.*

³³ 例えばアゲシラオスとリュサンドロスの関係について。前者がスパルタ王に即位するには、全欧の息子がいるため、少々無理があった。プルタルコスの記述は、彼の王位継承成功に、既にその軍事・政治力がスパルタ社会で評価されていたリュサンドロスが、大きく貢献したことを、示唆する (Plu. *Ages.* 3.4~5, *Lys.* 22.6)。これに関して HG は、プルタルコスでも示されるリュサンドロスのアゲシラオス擁立弁論に言及するのみで、背景にある彼の貢献には沈黙している。またアゲシラオスによるリュサンドロス左遷の原因は、HG 3.4. 7f. では、参謀たちの妬みに因る中傷、とされるが、プルタルコスは「この（アジア侵攻）作戦が成功した場合、これまでの名声によってリュサンドロスの功となってしまうのではないか、との名誉心の強いアゲシラオスが危惧したため」と見る (Plu. *Ages.* 7.4)。Cf. Hamilton, *Agesilaus and the Failure of Spartan Hegemony*, 1991, Ithaca and London, 37f.

えれば、力を尽くして戦う、と宣言する。つまりこの会談で描かれているのは、「ギリシア的価値」と「ペルシア的価値」の衝突、である。

HG のアゲシラオスのアジア遠征には、会話をともなった物語風エピソードの記述が、三箇所ある。リュサンドロス解任の際のもの（3.4.7～11）、スピトリダテスの娘とオテュスの婚約に関するもの（4.1.3～15）、そしてこの和平会談、である。これら「エピソード」は、クセノポンが好んで描くものであるが、その中でもこの「和平会談」には特別な意義がある。前二者は、背景に対する説明が十分でないため却ってアゲシラオスの非情さを際立たせるものだったり、のちに彼の陣営から離脱する外国人部隊に関するものにすぎなかったりする。しかし和平会談におけるアゲシラオス像は、彼個人に関しては極度の理想化から免れ、ギリシアの理念の主張をするという、現実性を強く帯びたものになっている。前掲のポルピュリオスによる評言も、クセノポンによるアゲシラオス描写の成功を評価してはじめて、説得力をもつものとなるのである。